

2023（令和5）年11月11日

山口西田読書会 2023年10月14日のプロトコル

村上優子記

【範囲】

西田幾多郎全集四巻 278頁4行目~279頁13行目まで

【キーワード又はキーセンテンス】

我が我を知ることができないのは述語が主語となることができないのである。（279頁5行目）

【考察及び問い】

言葉にするということは対象を判断の述語面に映すということである。鏡に映すということである。それは対象としては矛盾を含まないものに対し、矛盾を与える事であり、そうした矛盾を生み出す存在として今、私は在る。しかし、西田のいう「我」は「誰の我でもなく、誰の我でもある。そうした我である」（読書会だより10月14日）という。またテキストに「直観といふのは述語的なるものが主語となることである。」（275.8）とある。述語的なるものが主語となるような事態、直観においては、矛盾を生み出す存在である私も「我」として存在し得るのだろうか。（256文字）